

1. はじめまして このコーナーを執筆する別宮川三郎です。

普段、私たちが見る吉野川の下流は、大きな堤防が北岸・南岸に築かれ、雄大で情緒豊かな景観や自然など様々な恵みを与えてくれます。皆さん何気なく触れていると思いますが、この姿は、自然史と社会史が交錯してきた歴史的背景の影響を大きく受けています。

ご存じでしょうか？堤防が築かれたのは、僅か 90 年前のことであり、それまで、頑丈な堤防はなく、洪水との闘いの歴史であったことを。ご存じでしょうか？僅かな堤防を築くため命をかけた先人たちが居ることを。

今の堤防は、水を巡る紛争や調整など歴史的背景の結果として存在しています。私たちは、その財産を預かっているに過ぎません。その恩恵を受ける一員として、先人たちが築いてきた財産を後世に的確にバトンタッチするためにも、吉野川の歴史的経緯を伝えることが重要と感じています。この「吉野川歴史探訪」を通して、できるだけ分かりやすく伝えたいと思いますので、吉野川の歴史を探訪しましょう。

2. 歴史を未来にどのように伝えるか

川は生きています。と同時に、歴史も息づいています。洪水を体験した人が少なくなり、その恐ろしさが風化しつつある今、洪水遺跡を通して過去の歴史を当時の社会背景とともに蘇らせ、未来へ伝えることが重要と考えています。

まずは、藩政期頃の吉野川を振り返りましょう。

(1) 洪水国にもたらされた自然の恵み、阿波藍。

吉野川は、古くから「四国三郎」と呼ばれ、「板東太郎」の利根川、「筑紫二郎」の筑後川とともに、我が国の三大暴れ川に数えられ、阿波は全国でも有数の洪水国でした。吉野川の兩岸に大きな堤防ができたのは昭和初期のことであり、それ以前は経済的にも技術的にも洪水を防ぐような大堤防は築くことができなかったと言われていました。このため、毎年のように氾濫する吉野川が稲作を不可能にしていたので、台風期前に収穫できる藍を栽培するほかなかったのです。



吉野川河口

また、氾濫で形成された「流水客土」と呼ばれる肥沃な土壌が藍に適していました。阿波は全国一の藍どころになり、吉野川の氾濫原を暮らしの場としてきた人々は豊かな自然の恵みを受ける一方で、毎年のように暴れ狂う吉野川と闘わざるを得ない宿命を背負っていたのです。

(2) 吉野川の歴史は洪水と水害の歴史。そこには、生活の知恵と治水技術がありました。

吉野川を自然史的に見れば、まさに洪水の歴史です。また、大洪水の歴史に人々の営みを重ね合わせてみると、それは水害の歴史です。徳島市の蔵珠院というお寺には、慶応2年(1866)の「寅の水」といわれる大洪水のときのシミが茶室などに残されています。

また、庶民の信仰の対象として親しまれているお地蔵さんは、全国至るところで見られますが、吉野川流域に残されているそれは、水難に関わるものが多く、洪水に流されないようにとの願いから、台座が高いのが特徴で「高地蔵」と呼ばれています。



洪水の跡
(徳島市国府町)



高地蔵
(徳島市国府町)

また、人が川と闘い、しかも川と生きようとするとき、そこには生活の知恵が生まれます。氾濫原には、いわゆる「城構えの家」が散見できます。かつて、藍商であった石井町の田中家は、その代表的なもので、洪水による家屋の流出などを防ごうと、周囲より高く土盛りをして石垣で囲んでいます。



田中家
(名西郡石井町)

人々はまた、自分たちの集落を守るために、自然を巧みに利用し、土を掻き寄せて築いた「掻寄堤」や水防竹林などの水防技術を編み出しました。

このように、普段、私たちが何気なく歩いている吉野川流域には、洪水遺跡が数多く残っています。これらは、過去の洪水の恐ろしさをまざまざと伝えるばかりではなく、そこにはかつて私たちの祖先が川と闘いながら、しかも川とともに生きようとした、たくましさを感じることができます。皆さんも機会があれば洪水遺産を訪ねてみてはどうでしょうか？



水防竹林
(三好市三野町)

次号は、かつて洪水のたびにその流路を変え、幾筋にも分かれながら徳島平野を勝手気ままに奔流していた吉野川河道の変遷について探訪します。